

イネカメムシの発生地域と被害		
[要約] イネカメムシの発生が鹿行地域および県南地域で増加しており、被害の多い水田も認められる。		
農業総合センター農業研究所	成 果 区 分	技術情報

1. 背景・ねらい

イネカメムシは茨城県における斑点米カメムシ類の主要種であったが、昭和50年代以降はほとんど生息が確認されていなかった。しかし、近年になってイネカメムシが水田で確認されるようになってきている。そこで、イネカメムシの発生地域と被害の実態を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

1) 平成19年産水稻の検査規格2等以下の玄米サンプルについて、斑点米(カメムシ類による被害粒)を調査したところ、イネカメムシ特有の被害粒(胚部加害型の斑点米)の多いサンプルが、鹿行地域と県南地域で認められた。(表1、図1、図2)

2) 上記サンプルの中には混入率が0.7%を超えるもの(検査規格で「等外」に相当)も認められ、イネカメムシによる被害が等級低下の原因となっている。(表2)

3) 平成20~21年に水田で行った調査では、鹿行地域から県南地域にかけての地域でイネカメムシ成虫および幼虫の生息が認められる。また、この地域ではイネカメムシによる被害粒も認められる。(図2、図3)

3. 成果の活用面・留意点

1) 以前は、県下全域でイネカメムシの生息が認められた。今後、鹿行・県南地域以外でも発生が増加する恐れがある。

2) イネカメムシは、日中は株内に潜んでいることが多いので、調査を行う際は株内の生息に注意する。また、すくい取りによる調査は、夕方に行うと捕獲効率が高い。

3) 防除は、クモヘリカメムシに準ずる。

4. 具体的データ

表1 イネカメムシによる被害（平成19年産水稻）

地域	調査 サンプル数	イネカメムシ 被害サンプル数
県北地域	17	0
県央地域	9	0
鹿行地域	18	5
県南地域	50	11
県西地域	18	0



図1 イネカメムシによる斑点米（胚部加害型）

注) 品種：「コシヒカリ」、「ゆめひたち」
玄米サンプルに混入している斑点米のうち、胚部加害型が50%以上を占めるものを、イネカメムシによる被害と判断した。

表2 斑点米混入量別サンプル数（平成19年産水稻）

地域	被害サン プル数	イネカメムシによる斑点米混入率			
		~0.1%	~0.3%	~0.7%	0.7% <
鹿行地域	5	0	1	4	0
県南地域	11	0	7	1	3

注) サンプルは、表1のイネカメムシ被害サンプルである。
イネカメムシによる斑点米混入率 = 胚部加害型斑点米粒数 / 調査玄米粒数 × 100

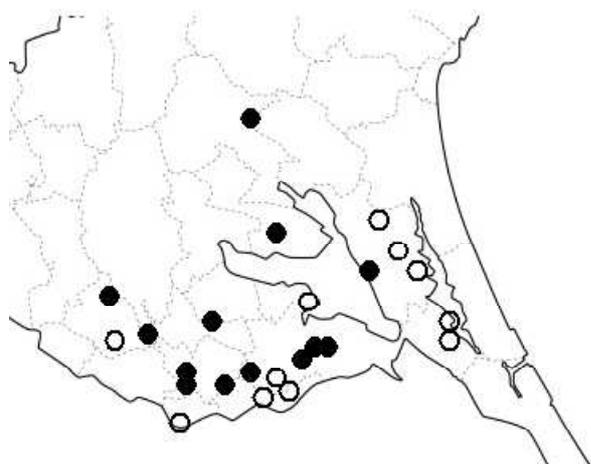


図2 イネカメムシの発生地域（平成20～21年）
●：イネカメムシの生息を確認した水田
○：イネカメムシによる斑点米が多い水田
（表1の地点も含む）



図3 イネカメムシ
左：成虫（体長：13mm前後）
右：幼虫

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

水稻病害虫の発生に応じた地域対応型防除体系の確立・平成19～21年・病虫研究室